ＦＤ報告書

2019 年度

大東文化大学

全学ＦＤ委員会

２０１９年度

各学部・学科・研究科

ＦＤ活動報告

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

文学部

開催日時：　2020 年 3 月 11 日（水）15:30～16:30　（文学部教授会 13:45～15:20 終了後）

開催場所：　板橋校舎　2 号館　2-0220 会議室

テ ー マ：「教えと学びのバランス ―学生を満足させるには！―」

発 表 者：　山田　悠介　（日本文学科 講師）
　　照沼　阿貴子（英米文学科 准教授）
　　北風　菜穂子（教育学科 講師）

司会進行：　髙城 弘一（書道学科 教授）

内　　容：　山田講師：「内容別英語クラスの授業について～「英米作品講読」の事例～」
　　照沼准教授：「文学部共通英語科目について：科目の特色、学生の傾向、当面の課題」
　　北風講師　：「「教育相談」の基礎理論：コミュニティカウンセリングモデルについて」

以上の各内容で、いかにして教えと学びのバランスを両立させ、学生からの満足を得るかということについての研究会を開催した。専門の各担当授業を通して、具体的な事例を交えた発表となった。

質疑応答もあり、参加者 75 名の間で活発な議論を行い、この課題に対する理解を深めるに至った。

以上

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

文学部研究科

2019 年度文学研究科 FD 報告会では、以下の共通テーマを設定し、専攻ごとに報告してもらった。

共通テーマ：「大学院の講義・演習等での工夫点」

日時：2019 年 11 月 18 日（月）15：10～16：40
場所：板橋校舎 2 号館 2 階 2-0221 会議室

報告者
　日本文学専攻：山口敦史　先生
　中国学専攻：吉田篤志　先生
　英文学専攻：河野芳英　先生
　書道学専攻：歳森芳樹　先生（ご欠席）
　教育学専攻：杉田明宏　先生

参加人数　31 名

今年度は、共通テーマとして「大学院の講義・演習等での工夫点」を設定した。
それぞれの専攻からは、学生に古典の解釈は一つではないことを気づかせるため、古典を読む際に学生と一緒にゆっくりと読み進めていくことを重視したり、学生の実力を図るために学生との対話を大事にしたり、学生に授業への関心をもたせるために授業前の導入部分に配慮する、といった講義・演習での工夫点が報告された外、留学生の多い専攻からは、語学の壁があり、多様なバックグラウンドと志向性を持つ学生の指導の困難さ・課題点なども報告された。
いずれの報告も各専攻の大学院授業の様子がよく伝わる内容であり、本 FD 報告会により専攻間において現状の情報共有がなされたものと思われる。

以上

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

経済学部

■日　　時：2019（令和元）年 12 月 13 日（金）14:00～14:30
■場　　所：板橋校舎 2 号館 2 階 2-0221 会議室
■出席者数：経済学部 37 名、経済学部事務室 4 名
■経済学部 FD 研究会

■テ ー マ：大東文化大学図書館の学習支援について－現状と事例報告－
■発 表 者：角張亮子 氏（本学図書館事務部長）

■内　　容：

図書館事務部長の角張亮子氏に、本学図書館での取り組みについて話をうかがった。はじめに、全学および経済学部学生の図書館の利用状況について具体的な数字や最も読まれている書籍などの紹介があった。これらについては他学部との比較もあり、経済学部の学生の好みなども理解できた。また、図書館が行っている教員の推薦図書の紹介やデジタルサイネージの利用、学生参加によるビブリオバトルなどのイベントなど様々な取り組みも知ることができた。特に、今年度はオリジナルのキャラクターを作った上で、より目立つ動画をデジタルサイネージで紹介しており、学生を引きつけることに成功しているようである。

教員からは下記のような質問があり、角張氏よりご回答いただいた。

1. 経済学部学生は他学部と比べて利用状況に特徴はあるか、との質問に対し、利用冊数などの大きな違いはないが、毎年図書館ガイダンスをよく利用しているとの回答があった。経済学部の１年生向けのゼミである基礎演習では図書館ガイダンスを受講すること原則としているため、ほとんどの学生がガイダンスを受けている。入学時点では読書習慣のない学生が多い中で、図書館に親しむきっかけとなっていると考えられる。

2. 他学部で効果的な、あるいは興味深い取り組みはあるか、との質問に対し、週刊読書人ウェブ（下記 URL 参照）に書評を投稿し、大学生と「週刊読書人」編集部（著）『書評キャンパス at 読書人 ２０１８』（読書人、2019 年）に本学学生が紹介されるなど、学生の学習意欲も高まってきているとの報告もあった。学生はインターネットなど様々なメディアに親しんでいるので、学生が馴染みやすい形で読む習慣をつけ、文章化する取り組みは教員の授業計画のアイデアとしても役立つと考えられる。

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

外国語学部・外国語学研究科

2019 年 10 月 14 日（月）第１回外国語学部・外国語学研究科合同ＦＤ研究会開催

テーマ：　障害を抱えた学生に対する中国語の授業の実践報告

発表者：　田村 新 講師（外国語学部中国語学科）

内　容：　2018 年度、感受性難聴という障害を抱えた学生が文学部などの学生が履修できる中国語基礎 1 を履修した。その学生と話すと、自分の名前すらしっかりと聞き取れるように話せない重度の障害だということが分かった。その学生に対して，どのように中国語を教えたのか、一年教えどこまでできるようになったのかについて報告をすると共に、身の回りにいる障害を抱えた学生に対して，どういうケアーを行ってきたのか情報を共有した。

参加者人数：43 名

2019 年 11 月 11 日（月）第２回外国語学部・外国語学研究科合同ＦＤ研究会開催

テーマ：「グルグル」メソッドによる大人数教室でのアクティブ・ラーニング

発表者：　靜 哲人 教授（外国語学部英語学科）

内　容：　英語の楽曲を主たる教材として音声面の能力を伸ばすことを目標とした、大教室での授業実践を紹介した。

⑴ まず「グルグル」メソッドとは、一斉授業の中で教師が学生個人個人に近距離で相対して次々と個別指導・評価を行う手法である。座学と対極にいちし、いわゆるアクティブ・ラーニングの一種ととらえることもでき、筆記テストとは対極にあるパフォーマンステストの一種ととらえることもできる。

⑵ つぎに教材としての歌の使用は、単なる訴求力の高さにとどまらず、歌詞を構成する音節がメロディを構成する音符と基本的には一対一で対応しているという原則があるために、適切に歌唱することがすなわち適切な音節数で英語を発話することに通じるはずである、という理念で行うものである。

「英語教育学入門A・B」は以上の2つを実践している英語学科の自由科目（1年次）である。50～100名程度の履修者を対象としてどのように「グルグル」メソッドを使いながら歌わせているか、を授業録画もまじえて紹介した。

参加者人数：41 名

2020 年 1 月 20 日（月）第３回外国語学部・外国語学研究科合同ＦＤ研究会開催

テーマ：「高等教育における高次脳機能解析を援用した言語・音声研究」

発表者：　福盛 貴弘 教授

（外国語学部日本語学科/外国語学研究科日本言語文化学専攻）

内　容：　音声学が、音声を発する際の声道の動きをとらえる調音音声学、口唇から放出された音波を解析する音響音声学、音波を知覚してから脳内での認知を扱う聴覚音声学の三分野から構成されていることは、専門家にとっては周知の事実である。とりわけ、基礎研究に携わる者にとっては、すべての分野における実験手法を体得しておかなければならない。これは大学院生にとってもしかるべきである。それは、それぞれの視点

だけではなく、相互性を鑑みて統合することが重要だからである。脳科学を援用した言語研究は 1980 年代以降に発展してきた経緯があるが、まだ未知の領域は多い。今回は、誘発脳波の中で、高次脳機能を解析するための事象関連電位を扱った研究成果の一部をふまえて、音声・文法・意味に対してどのような接近法を試みてきたかを紹介した。

参加者人数：26 名

2020 年 1 月 27 日（月）第４回外国語学部・外国語学研究科合同ＦＤ研究会開催

テーマ：「入試方式別に見た新入生の成績」

発表者：上村 圭介 教授（外国語学部日本語学科）

内　容： 日本語学科の必修科目「日本語学基礎演習」の試験データを分析し、入試方式と新入生の成績の関係について考察したところ、経年分析から、一般入試による入学者の成績が低下し、推薦入試による入学者の成績が上昇していることを報告した。一般入試による入学者の増加は、受験者母数の増加がともなわない限り、入学者集団全体としてみた場合の学力低下を招く懸念があることを指摘した。

参加者人数：38 名

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

法学部　法律学科

2019 年 10 月 23 日（水）　法律学科 FD 研究会

テーマ：授業支援システム（LMS）を用いた法学教育の可能性
—授業形態・内容別の DB manaba 活用実践を通して—

発表者：河野良継（法学部法律学科）

内容：発表者より、2018 年より導入された DB manaba と、リアルタイム・アンケート・アプリ respon の活用例の報告がなされた。DB manaba については、報告者が担当する科目のうち、知識の修得を重視する法学（法律学入門）A・B や基本法学概論 A・B において小テスト機能が用いられていること、それも含めたその他の科目においてはコースコンテンツを利用して授業で使用したスライドの掲示などがなされていることが報告された。

また、respon については、出席調査を目的として専門演習を除くすべての科目で利用されていること、また問題演習を基本法学概論 A・B、授業内容と関連する話題についての選択式アンケートが法社会学や全学共通科目の日本国憲法で用いられていることなどが報告された。その上で、これらの手法は学生を授業に引き込むメリットがある一方、授業準備の手間が倍程度になるデメリットがあることなどが紹介された。

報告後の質疑応答においては、実際のシステムの使い方、学生がアプリをダウンロードする際の問題点などの技術的な面のほか、どのような発問がより効果的かなどの教育メソッドにも及ぶ質問がなされ、LMS をすでに導入している教員はもとより、それ以外の教員にとっても有意義な報告と質疑応答がなされたものと思われる。

なお、河野良継「授業支援システム（LMS）を用いた法学教育の可能性—授業形態・内容別の DB manaba 活用実践を通じて—」大東文化大学法学研究所報 40 号（2020 年）27 頁以下に、同報告の内容が掲載されている。

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

法学部　政治学科

2019 年 8 月２日（金）～３日（土）　2019 年度FD合宿実施

場所 ： ホテル・ヘリテイジ（埼玉県熊谷市小江川 228）

参加者: 13名

テーマ1:「政治学 AB」科目と初年次教育

「政治学AB」授業報告

報告者: 齊藤哲郎教授(法学部政治学科)

内容: ①政治学プレースメントテストと授業成績：政治学プレースメントテスト成績水準と、出欠状況・受講態度との関連度は希薄であるが、授業理解度・授業成績（答案作成、授業コメント作成）とは概ね相関がある。②推薦入学者に対する入学前教育（課題図書の選択状況）：「18歳からの政治入門」 26名、「財政から読みとく日本社会」 9名、「社会とどうかかわるか － 公共哲学からのヒント-」 4名、「質問する、問い返す － 主体的に学ぶということ －-」 10名

「英語AB」等担当者人事計画

報告者: 小倉いずみ教授(法学部政治学科)

内容: ①非常勤講師は5年雇用されると無期雇用になる。しかし、コマ数は保証していないので減コマは可能。②前期2回、後期2回以上を休講にした場合は、無期雇用であっても翌年は依頼しないことを毎年年度初めに確認している。③英語の担当クラスは1年と2年で重複しないようにしている。④強化クラス担当可能な教員は限られている。

→今後の教員配置の自由度を確保するため「政治学 AB」「英語 ABCD、英語応用 ABCD」「入門演習 AB」のクラス数を 6 から 5 にする。クラス定員は 25 名から 30 名に増加するが問題ない。プレースメントテストの成績による政治学選抜強化クラスと英語選抜強化クラスを独立に選抜する。ただし政治学選抜強化クラスに英語の成績不良者が含まれないようにする工夫（およびその逆）が必要である。

テーマ2:　政治学科教育のあり方

報告者: 穴見明教授(法学部政治学科)

内容: 本学政治学科の学生を対象として、大筋において現行の政治学科のカリキュラムを前提としてどのような教育が考えられるか、問題提起された。→これを受けて参加者全員による議論が交わされた。

テーマ3:　教職課程再認定に向けて

報告者: 中根一貴准教授(法学部政治学科)

内容: ①令和 4 年度（前後 1 年）に再課程認定が予定されている。教職課程を維持する場合、それに向けた対策が必要である。②特に導入が予想される教職コアカリキュラムに関する業績審査に向けた対策を検討しなければならない。これを学科全体のカリキュラムを見直す機会と捉えることもできる。

テーマ4:　政治学インターンシップ（アクティブラーニング）科目の運営

報告者: 武田知己教授(法学部政治学科)

内容: 2・3年生合同での授業運営をやりやすくするため、またキャリアセンターと連携して説明会や情宣活動を行うため、アクティブラーニング事業を「現代政治のイッシュー（国内外喫緊の政治的諸問題 AB）から「政治学インターンシップ」へ切り替えることとする。→これを踏まえて、運営方法(現地研修の実施場所)、担当者、シラバスなどの詳細、学生募集の方法等について整理し、確認した。

以上

2019 年度 FD 活動報告書

国際関係学部

本年度の学部・学科における FD 活動の取組みのうち、研究会の開催、その他 FD 活動について、具体的にご記入ください。**なお、実施日と参加人数について、必ずご記入くださるようお願いいたします。**

2019 年 10 月 29 日（火）第 1 回学部ＦＤ研修会開催（8342 教室）15 時～16 時 30 分

テーマ：「『タクナル』メソッドによる授業実践報告」

講師：細田咲江先生（国際関係学部教授）

参加人数：24 名

内容：

国際関係学部では、2019 年度から、チュートリアル（初年次必修）の 4 つのクラスで（株）リアセックの『タクナル』式・主体性開発メソッドを使った授業がはじまりました。

タクナルとは、与えられた知識を学ぶのではなく、様々な問題を自分で考え、他者と意見を交わし合いながらチームでひとつずつ問題を解決していく、「これが正解」という答えはなく、自分たちで「ベストな答え」を考え出す学びのスタイル。

3 月に「タクナル」のファシリテーター養成研修を修了した細田咲江先生がコーディネーターとなり、細田先生、岡本先生、飯國先生、田崎先生が担当するクラスを対象に実施されました。

研修会では、細田咲江先生による授業の実践報告に続き、リアセックの酒井陽年氏による PROG テストによる受講者の「成長分析」が報告されました。

報告終了後には、30 分にわたって、ファシリテートの実践や、PROG による成長測定の有効性などに関して、矢継ぎ早に質問が出されました。

国際関係学部の教職員 16 名の他、第一高等学校、学務課、総合企画課、東松山キャリア支援課、東松山図書館など、他部局の 7 名の教職員の方々にもご参加いただき、期せずして全学的なＦＤ研修会になりました。

以上

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

経営学部・大学院経営学研究科

2019 年 12 月 17 日（火）　第 1 回 経営学部・経営学研究科 FD 研修会
テーマ「プレゼンテーションセミナー」
講師：特定非営利活動法人国際プレゼンテーション協会　理事長　八幡紕芦史 先生
場所：板橋校舎 1 号館　407 号教室
時間：13:00~15:30
参加者（　16　）名

令和元年 12 月 17 日，板橋校舎 1 号館 407 号教室にて，特定非営利活動法人国際プレゼンテーション協会の理事長である八幡紕芦史先生を迎えて，経営学部・大学院経営学研究科合同の FD 研修会を開催した。研修の目的は「プレゼンテーション（以下,「プレゼン」と略す）の基本的な理論と技術を習得」することである。研修は 5 分の休憩を挟んだ 90 分間で行われ，プレゼン戦略，シナリオ作成，デリバリー（効果的な伝達技術）の三段構成で実施される予定であったが，今回の研修では，より重要な項目に絞り，前半でプレゼン戦略，後半でシナリオ作成について重点的に学習した。

八幡氏はプレゼンテーションには必ずしも「パワーポイント」を使わなくても良い。むしろ，スクリーンではなく自身が主役になったプレゼンを実演するという目的から，スクリーンを用いないプレゼンを実演した。プレゼンの基礎となる「プレゼン戦略」では，三つの P を意識するよう提起した。一つ目が People であり，聞き手が誰であるかを意識しなければならない。次に Purpose であり,「話し手の話したいこと（目的）と聞き手の聞きたいこと（目的)」が異なっているのではないか。もしそうであれば，聞き手の目的あるいはメリットに着目したプレゼンでなければならない。三つ目の Place であるが，これはプレゼンを行う場所に応じたプレゼンを行うというよりは，プレゼンに集中しやすい環境を作るべきだという提起であった。例えば，今回の研修では，机を撤去し椅子だけを配置して前から順番に座らせる，時間を気にしないように教室の時計を隠すなどの工夫がされていた。

休憩を挟んで後半は，プレゼンのシナリオ作成についての研修が行われた。まず，結論がどこにあるかわからないシナリオを作ってはならず，最初に結論を置き，次に理由，さらに結論を繰り返すといった結論と理由のサンドイッチを基本単位とすることが推奨された。この基本単位を三部構成で積み重ねていくシナリオ作成が推奨された。

最後の 10 分間では質疑応答の時間がとられ,「大規模授業では，多様な目的を持った学生が集まっているために，共通項を見出すのが難しいのではないか」,「例えば企業における会計に関する講義など，これまで学生が経験したことのない分野で，どのように興味を引き出すのか」,「対話式の講義を試みているが，学生が返答に詰まり沈黙が続いてしまう場合があるが，こうした場合の対応はどのようにしたら良いのか」，などといった数多くの質問が寄せられた。解決が難しい問題であるためか，講師から万全な解答が得られたとは言い難い状況ではあったが，例えば,「学生を褒めること，褒める時前には『相手の答えを反復する』」などの実際的なレコメンドを受けた。経営学部（経営学研究科）では，研修後引き続いて内山研一教授による「大東型アクティブラーニングのすすめ」というテーマの講義も開催されたため，相乗効果もあって，たいへん学びの深い FD 研修となった。

以上

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

環境創造学部

今年度本学部は、以下の通り FD 活動として「教育研究ワークショップ」を開催した。

○2019 年度　第 1 回環境創造学部教育研究ワークショップ

開催日時：　2019 年 6 月 6 日（木）　15：00～
開催場所：　板橋校舎 環境創造研究スペース
参加者　：　14 名

報告者：　宮地秀門 教授

テーマ：　「『BEPS プロジェクト』及び『BEPS 最終報告書』の検証」

内　容：　前年度 1 年間の国内研究の成果として執筆された論文原稿に基づいて報告を頂いた。主な内容としては、BEPS（Base Erosion and Profit Shifting、財源侵食と利益移転）の意味と実態の整理、「BEPS プロジェクト」の検証の経緯、「BEPS 最終報告書」の勧告を踏まえた日本の税制改正、日本の関係当事者の評価、そして日本の対応と国際課税に関する一連の税制改正を含む租税政策についての検証等に関して示唆に富むものであった。報告後、それにかかわる質疑応答が行われた。

問題提起者：土居良一 准教授（環境創造フォーラム運営委員長）

提起内容　：「2020 年度学部教育イベント（環境創造フォーラム）について」

内　容　：　本学部は、2020 年度は就職活動に注力しなければならない 4 年生と数名の過年度 3 年生のみの学生構成となる。環境創造学部から社会学部への移行期おいても「これまでの教育の質を維持する」という基本方針はこうした教育プログラムにおいても堅持してきたが、意見交換の結果、従来のように多くの参加者が見込まれないと判断し開催中止を決定した。

以　上

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

スポーツ・健康科学部

２０１９年6月１８日（火）　第１回スポーツ・健康科学部 FD 研究会開催（全学 FD と同時開催）

テーマ：「市民の健康・スポーツ課題に対する大学のあり方」

場　所：東松山校舎管理棟 3 階 大会議室

内　容：地域住民のための健康・スポーツに関する取り組みについて、シンポジストの Joop Pauel 氏（Nova College CIOS オランダ）、Jan Hoogmoed 氏（Nova College CIOS オランダ）、玉木 啓一氏（武蔵丘短期大学）、太田 眞氏（本学健康科学科）、森浩寿氏（本学スポーツ科学科）各氏よりご紹介いただき、今後の地域貢献、社会貢献の継続、発展について多くの示唆を得た。また、当日は TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）会員校からの参加（十文字学園女子大、女子栄養大）もあり、活発に意見交換を行った。

参加者（スポーツ科学科）：16 名
（健康科学科）：14 名
（看護学科）：32 名

２０１９年7月２３日（火）　第２回スポーツ・健康科学部 FD 研究会開催
（スポーツ･健康科学研究科 FD と同時開催）

テーマ：「研究倫理について」

場　所：東松山校舎管理棟 3 階 大会議室

内　容：本学研究倫理審査委員会委員長の片山 克行氏を招き、「インフォームドコンセント」をテーマに講演を行った。また、本学研究推進室の高塚 弥氏より、研究倫理審査に関する申請手続きについて説明がなされた。参加者は「大東文化大学ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理規定」およびその審査体制、項目等について理解を深めることができた。

参加者（スポーツ科学科）：22 名
（健康科学科）：21 名
（看護学科）：39 名

スポーツ・健康科学部 看護学科

２０２０年2月４日（火）１０時～１２時　２０１９年度第１回スポーツ・健康科学部看護学科ＦＤ研修会

テーマ：ルーブリック評価を中心としたアクティブラーニングにおける学修評価の在り方－臨地実習に焦点をあてて－

講　師：帝京平成大学　ヒューマンケア学部看護学科　教授　北川　明 氏

場　所：４号館２階　アクティブラーニング室

内　容：近年の高等教育政策の動向により「ティーチング」から「ラーニング」への学士課程の質的転換の確立を目指した好循環を重視する動きがみられている．そこで教育方法の改善の１つとしてのアクティブラーニングは「能動的学習経験」と「省察的学習経験」の双方を含み学習者が能動的に学修することで認知的・論理的・社会的能力・教養・知識・経験を含めた汎用的能力の育成を図る目的で導入され，本学においても積極的に推奨している．そこで，本研修会ではパフォーマンスに応じた明確な評価基準を設ける『ルーブリック評価』を用い，アクティブラーニング時における評価の作成ならびに活用法を知ることを目的とした内容を実施した．参加者は学科教員３７名（出席率９２．５％）であった．実施後アンケートをとったが内容に参考になった/やや参考になったが９７．５％（回収率：９７．１％）であり好感触であった．また本研修は「タイムリーな内容」であった，「継続化」ならびに「シリーズ化」を要望する回答等が多くあった．その反面開催時間が短い背景からルーブリックに関する実施運営に関する質問が多く出現し，各個人からの好奇心や「ぜひ試用したい」という興味関心を垣間見た．本内容が大学方針と合致する点を含め概ね良好であったと考える．今後，教育活動を円滑するツールの１つとして詳細について検討を重ねたい．

出席者：37 名

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

スポーツ・健康科学研究科

○2019 年 7 月 23 日（火）：第１回スポーツ・健康科学部（学科・研究科合同）ＦＤ研究会開催

演題①：インフォームドコンセントについて

発表者：片山克行氏（ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会委員長）

内　容：インフォームドコンセント（以下、IC とする）について、医療紛争に関わられてきた経験を踏まえて、いくつかの知見を述べられた。

まず、IC に関する現状の問題点として、①研究実施者と被験者の間に圧倒的な知識量の差がある、②IC の受け止め方が、申請者と審査側で異なる、③被験者の自己決定権との関係、④研究性質の違いに関連する問題、などを挙げ、多くの人に、単に「説明して、同意書にサインをもらう」ことが IC であると捉えてしまっている傾向があると指摘した。そして、IC とは「説明と同意」であり、「医療行為や治験などの対象者が、治療や臨床試験・治験の内容について、よく説明を受け、十分理解した上で、対象者が自らの自由意思に基づいて医療従事者と方針において合資することである」とした。

次に、IC の成立要素として、①被験者の同意能力、②医療従事者による適切な説明、③任意の意識的な意思決定による同意、を挙げ、同意能力の前提として、①説明を理解できること、②事故の現状を正しく理解できること、③自分の考えに照らして、説明・状況の評価・検討と決定の意味が理解できること、④医療行為の実施・不実施について理性的な決定ができること、を挙げた。そして、いかに“説明”を詳細にするかが重要であるとし、説明に当たっては、①付随する危険（病名、病態など）、②医療水準に照らして、その発生を回避することが不可能とされる死亡や合併症の危険についての説明、が不可欠と指摘した。

さらに、研究倫理違反のケースを例示し、意識改革と注意を呼びかけた。

演題②：ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会審査案件の取り扱いについて

発表者：古田康晴氏（研究推進室・板橋）、高塚　弥氏（研究推進室・東松山）

内　容：ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会における審査に係る手続きについて、申請から審査に至るまでの重要ポイントについて概説された。

まず、社会の現状と本学における新たな取り組みについて、これまで「研究倫理審査委員会」としていたものを、「ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会」に制度変更した旨が紹介された。

そして、新たな審査体制並びに審査手続きについて解説された。特に、個人情報の取扱いやインフォームドコンセント、申請時期等について言及された。

参加者：11 名

２０１９（令和元）年度　ＦＤ活動報告書

社会学部

今年度本学部は、以下の通り FD 活動として「教育研究ワークショップ」を開催した。

◆2019 年度　第１回社会学部教育研究ワークショップ

開催日時　：　2019 年 7 月 25 日（木）　15：00～16：30

開催場所　：　板橋校舎 3 号館 5 階・社会調査準備室（旧環境創造研究スペース）

参加教員　：　18 名

報告者：　株式会社ナガセ／ビジネススクール本部
東進ハイスクール大学事業部
竹間富夫氏

テーマ：　2019 年度推薦入学者向け入学前教育および東進ハイスクールによる本学部入試の結果分析

内　容：　2019 年度新入生に対して社会学部独自で行った入学前教育（(株）ナガセによる通信教育プログラム）の実施結果（課題提出状況、成績、受講者の学習態度、寄せられた感想等）について担当教員、実施業者より報告を受け、質疑応答の後、今後の入学前教育の実施方法全般に関する議論を行った。全体として現在の学部プログラムは、受講生の反応も概ね良好であり、全学的に行われている入学前教育プログラムに比べて、入学後の社会学部での学びにより適しているのではないかとの評価が得られた。学部のカリキュラムに合わせて、入学前教育の内容をさらにカスタマイズしていくことが可能かどうか、実施業者と調整する必要があることが確認された。

以　上